

# 魂の叫びが身体を引き裂く! 平和への祈りに心が張裂ける! 未体験の衝撃と感動に早くも大絶賛の声!

ずっと、バンドラの箱をこじ開け続けよう。

## 絶望と向き合ってこそ、希望は失わない。

Coccoに触れる度、いつも勝手に決心している。

——マツコ・デラックス (コラムニスト)

母になったその日、女は逃れ得ぬ戦慄に身をやつす。

## 恐るべき母たちへ。そして全ての子供たちへ。

——金原ひとみ (作家「マザーズ」)

言葉にできない、とはこの映画を評する為にあるフレーズではないでしょうか？喜怒哀楽を超え、その先の、何か。その何かの先の、ずっとずっと先の…僕がかるうして伝えられるのは、

## 映画の申し子・塚本晋也監督史上最高傑作

であるということ。そして311以降の、闇と光、そのいずれにもCoccoの歌声と泣き声と叫び声は鳴り響くということ。塚本さん、Coccoさん、ありがとうございます。目が覚めました。生まればいいんですね。

——大根仁 (演出家、「モチキ」監督)

生きるために必要な資格はあるのでしょうか。絶望的な気分になりました。

でも、そこにあった小さな命はとても遅しく、私に希望をくれました。

## 決して、生きることを

諦めてはいけないと思いました。

——坂井真紀 (女優)

ひとりの人間の心が持てる深さ、暗さ、そして広さに

## 啞然となった。

——香山リカ (精神科医)

特別だけど普遍的な母性を描いた、**激しく、哀しく、温かい傑作。**媚びずに遅しく歌う母・琴子は、強く、弱く、そして美しい。

——林 加奈子 (東京フィルメックス映画祭ディレクター)

塚本作品の全ての要素が詰まった

## 新しい塚本映画が誕生した。

代表作「TETSUO」は社会に憤りを鬱積させた青年が血肉を錆と鉄に変えて、外側への暴力に覚醒させる物語。最新作「KOTOKO」は自らを切りつけては血を流して、「生」を問う女性の、内省的な暴力を昇華させる物語。「鉄男」は鉄の咆哮で世界を破壊したが、「琴子」は歌と踊りという音で、我々に問いかける。311後の日本から、塚本晋也がまた映画を変える。

——小島秀夫 (「METAL GEAR」シリーズ監督)

『KOTOKO』は多くのジャンルを自由に超えて、女性の壊れやすい心理状態と、孤立につきまとう深く不穏な思索と、現代都市生活についての印象的表現を創造する。パワフルなビジュアル言語で、塚本監督はヒロインの心に入りこむ。

——Jia Zhangke (ジャ・ジャンクー／監督、ベネチア国際映画祭リゾンティ部門審査委員長)

昔から唯一無二のアーティストとして憧れ、目標としていた

## Coccoさんの描く「あらわにすること」の美しさに、

私は一瞬も目を閉じることができませんでした。そして私ももっともつと己を強く持ちたい、そう改めて感じさせてくれた映画です。日々上手くやれてるつもりの私たちが奥底にしまい込んでる激情。それを惜しげも無く滴らせる琴子の生き様を、どうか目を逸らさずに見て下さい。

——KOTOKO (アーティスト)

## こんな形で希望を表現する方法があったのか。

見ている観客も同時進行で共有する、だから苦しい。人生そのものだから。

——ソニン (女優、歌手)

KOTOKOのむきだしの切なる想いに身も心も魂までも揺さぶられる。塚本映画においてはスクリーンのごちら側も絶対安全地帯ではなく、観客もまた無傷でいられない。

3.11後に生まれた凶暴で繊細な愛についての大いなる物語。

## 怪物級の傑作である。

——三留まゆみ (イラストライター)

**最強。**可愛さも、恐ろしさも、愛おしさも、面白さも、最強でした。

——星野 源 (俳優、音楽家)

**新生塚本晋也映画の傑作だ。**都市と肉体の相克に挑んだ塚本が、都市と精神の相克に挑む。鉄になる男から、錯乱する女へ。

えっ!? そんな映画はよくあるって!? 甘いな、リアルを超えて、かくもファンタスティックな映像で斬り込めるのは、塚本より他になし!!

——塩田時敏 (映画評論家)

「都市」と「海」それぞれの血のしたたる切断面を無理矢理くっつけて出来た一本の赤い線の女・KOTOKOが観客を恐怖と笑いと恋と愛と歌の増垣に叩き込む! その時我々は「**死なず」、「殺さず」に「生きる」ことがいかに強く儂いものであるのか**を知ることになる。

——羽生生純 (漫画家「恋の門」「俺は生ガンダム」)

母性の持つ危うさと強韌さを、激しく、また**抒情的に描ききった傑作だ。**不条理な世界と闘うかのように生きるヒロインの姿は、行く先の見えない現代を生きる我々に途方もないパワーを与えてくれる。

——市山尚三 (映画プロデューサー)

「**大丈夫! 大丈夫! 大丈夫!**」

劇中、塚本晋也が語る言葉をいつの間にか、KOTOKOにも、そして自分にも言い聞かせていた

——水道橋博士 (漫才師／浅草キッド)

他に類無き二人の尖りすぎた異常性が剥き出しのプライベートフィルム。この映画の感情の痛点を抉るような表現にどこまで耐えられるか?

「**大丈夫! 大丈夫! 大丈夫!**」

——KIKI (モデル、女優)

KOTOKOは自分の声を、体を使って命がけて外の世界とつながろうとする。**女優・Coccoはその間に立って孤独な叫びを伝えようとする。**

——那須千里 (映画ライター)

「**大丈夫! 大丈夫! 大丈夫!**」

劇中、塚本晋也が語る言葉をいつの間にか、KOTOKOにも、そして自分にも言い聞かせていた

——水道橋博士 (漫才師／浅草キッド)

塚本監督のCoccoへの深い尊敬と愛。それを受け止めて、信じられないくらい素晴らしい女優としての才能を発揮して見せたCocco。その究極の愛の爆発が生んだ、

## 深い絶望と、大きな希望がテーマの映画だ。

——渋谷陽一 (ロッキング・オン代表)

誰の心にも潜む、触れてはならない衝動に至る特別な旅。Coccoの演技は極めて精密で琴子そのもの。カメラは、琴子の中に入りこみ、そこで起こっている感情をキャブチャーする。観客は、鳴り響く警報と、終わると思う度にはじまるプレッシャーにさらされる。

——Thibault Delacour (ティボー・デラクール／ミュージシャン)

## Cocco初主演 塚本晋也監督作品

# KOTOKO

愛する息子を守ろうとするあまり現実と虚構のバランスを崩していく女性の慟哭と再生の物語。

KOTOKOは沖縄の日差しを深く吸い込み、暗く光る黒い石。

## Coccoさんの、歌が瞳がまぶしく心に刺さります。

暗さとまぶしさ、2つある。2つ感じる映画です。

——鈴木京香 (女優)

役者だけではない、誰もが人生という舞台を演じているわたしはこの虚構の世界でどんな役を演じているのだろうか**あなたはこの現実の世界でどんな役を演じているのだろうか**——りょう (女優)

「**ここ**」で描かれる世界は確かに痛く、辛い。でも今、僕にとって必要な痛みだった。あなたにとってもそうだと思う。

## ただ、見る者の覚悟に応える映画

であることは間違いない。

——松江哲明 (映画監督)

生きるとは…時に辛く感じ、だからこそありがたいと感じ色々と自分に教えてくれる人により生き方も違い 人により痛みの感じかたも違い 時には喜びさえも違う

正直色々な意味で凄く刺激を受けた映画でした あたしはCoccoが大好きです 何を知ってるかと聞かれたら何も知らない…でも彼女の存在が好きです だから彼女を見れて感動しました

彼女が全て写されているかは彼女以外わからないでも釘付けになりました

## 生きるとは…生きることだと思う

——土屋アンナ (モデル、ミュージシャン、女優)

この壮絶な痛みの向こうに彼女は何を見出すのか?**衝撃が今もまだ…。**——門間雄介 (編集者、ライター)

あかさんは痛くても、痛くても、世界に向かって目を見開き、**きたるべき不安や脅威に向かって叫ばなくてはいけないのだ。**

KOTOKOのように。

——金原由佳 (映画ジャーナリスト)

塚本監督の新境地とも言える大変な作品だった。Coccoさんがとても上手で素なのが演技なのか区別がまったくつかなかった。

いろいろ身につまされる内容でもありずっしりきた。心身ともにぐったりくる

## 圧倒的な映画。

冒頭の数分、あまりの衝撃に「90分もたん!」と冷や汗→これは塚本版ラブコメなのか!? と大笑い→やがて物語は映画の枠を破壊して恐るべき境地へ。

塚本晋也&Coccoという突出した才能が激しくスパーク、両者の熱を少しも損なうことなく

1本の映画に結実させた塚本監督の思念の強さに圧倒される。

## とにかくすごいのだ。

——浅見祥子 (映画ライター)

これは、コラポなんて生易しいものじゃない。映画界の鬼才VS音楽界の鬼才の、神経ギリギリのガチンコ勝負。塚本監督がCoccoの心の傷をグリグリ攻めれば、彼女は全身のエネルギーを使ってそれに立ち向かう。下手なアクションも顔負けの、

## 手に汗握る世紀の一戦だ。

だが最後には、塚本晋也という理解者を得て、苦悶から解放されていくかのようなCoccoの姿があった。鬼才は鬼才を知る——。二人の出会いに乾杯!

——中山治美 (映画ジャーナリスト)

この壮絶な痛みの向こうに彼女は何を見出すのか?**衝撃が今もまだ…。**——門間雄介 (編集者、ライター)

塚本映画の「痛点」を抉る先鋭性が、肉体を貫き精神を破壊する。瘦身のファムファタール=Coccoを相手に繰り広げられる、煉獄めいた男女の営み。

日常は絶えず病理に侵され、突如、悪夢のような奇跡を現出させる。そこに救いや赦しはない。

あるのはただ、剥き出しのまま暴走した“気の触れ合い”。

## その圧倒的な描写に怖気立ち、震えろ。

——天井潤之介 (ライター)

Coccoの演技は歌であり、Coccoの唄は演技だったのか…と思うくらいCoccoの演技は彼女自身だった。それは塚本監督が引き出した歌声だったのか!? ふたりの鬼才が出会ったことにより

**いまだかつて見たことのない“奇跡”**が起きた。

## その瞬間を、その目で確かめろ!

——山本英夫 (漫画家「殺し屋1 (イチ)」「ホムンクルス」)